

# 浸透する若者言葉の特徴についての考察 ～由来となった単語との比較から～

菊池 つばさ

## [目次]

序章	研究の動機と目的
第1章	若者言葉の現状分析
第1節	若者言葉の定義
第2節	若者言葉の特徴
第3節	過去の若者言葉から考察する定着の特徴
第2章	若者言葉に関する意識調査結果
第1節	「略語型若者言葉」に関する意識調査結果
第2節	「意味拡大型若者言葉」に関する意識調査結果
第3章	意識調査の分析と考察
第1節	「略語型若者言葉」における分析と考察
第2節	「意味拡大型若者言葉」における分析と考察
終章	研究の成果と課題
	参考文献一覧
	付録資料

## 序章 研究の動機と目的

現在の日本語、特に若者言葉は乱れているという認識はいつの時代でも問題にされている事項で、文化庁が行なっている「国語に関する世論調査」の近年の結果を見ても、国民の多くが若者言葉は日本語の乱れであるという認識を持っていることがわかる。しかし若者言葉に限らず、言語というものは使われていくうちに変化するものである。それは古語と現代語では語が変化していることや、世代間で使う言葉などが異なっていることなどからも当然にわかることである。歴史的にみても言語の変化は「乱れているから」という理由で止められるものではない。どのように変化しようとも、多くの人に受け入れられ使われる言葉やその使い方であれば、自然と定着し、そしてそれが言語となるのではないだろうか。

したがって本研究では、“よく知られていて使われている若者言葉”を完全に定着するには至っていないものの、ある程度定着しつつある若者言葉として“浸透している若者言葉”と定義し、浸透する若者言葉においてそこに特徴や傾向はあるのか、またあるとすればそれは何なのかを探ることを目的とする。

## 第1章 若者言葉の現状分析

### 第1節 若者言葉の定義

若者言葉は文字通り若者が使う言葉であるが、「若者」が指す決まった年齢や書き言葉の扱いをどうするか等、厳密な定義は未だなされていないようである。

井上史雄氏は若者言葉を「若者に目立って使われる語は、数十年後の使用がどうなるかに着目して分類できる」として「一時的流行語（一時的な新語や流行語等）」「若者世代語（世代を受け継いで使われ

るキャンパス言葉や学生語等)」「コーホート(同世代)語(その世代しか使わない流行語等)」「言語変化(新方言や確立した新語等)」の四分類にしている。

本論文では“定着するかどうか”という点から若者言葉を見ていくため、この井上氏の分類をお借りする。そしてその中の「若者世代語」と「言語変化」の2分類に当てはまるものを本論文での若者言葉の「定着」とし、この定着の傾向が見られる若者言葉を「浸透」している若者言葉と位置付ける。

## 第2節 若者言葉の特徴

米川明彦氏の『若者語を科学する』から「若者語の特徴」についての記述を引用させていただくと、『仲間内の言葉』『会話促進などのため』『規範からの自由と遊び』の3つが若者言葉の発生の理由と機能の特徴であると言える。

次に、もう少し具体的な若者言葉の特徴であるが、時代によって若者言葉にみられる特徴は異なる。

また同じ時代の若者言葉であっても言葉は様々で、特徴を全て挙げきることはできない。したがって現在の若者言葉に顕著にみられる特徴と言えるものを大まかに2つ取り上げ、独自に分類してみた。以下、本研究では次の2つの分類で若者言葉について見ていくことにする。

### ◆「短縮型若者言葉」◆

ある単語に接尾語をつけたり、省略したりして単語を短くした言葉を「短縮型若者言葉」とした。以下のようなものを含むとする。

- |                        |     |
|------------------------|-----|
| *名詞の一部に「る」をつけて動詞にしたもの  |     |
| *名詞の一部に「い」をつけて形容詞にしたもの |     |
| *語を省略したもの              | …など |

### ◆「意味拡大型若者言葉」◆

元々単語が持っていた意味とは異なる意味を持たせたもの(や曖昧表現も含む)を「意味拡大型若者言葉」とした。以下のようなものを含む。

- |                                   |     |
|-----------------------------------|-----|
| *本来の言葉の意味や使い方とは異なる使い方をされているもの     |     |
| *外来語やあまり知られていない言葉などを異なる意味で使っているもの |     |
| *全く違うわけではないが、曖昧な表現になっているもの        | …など |

## 第3節 過去の若者言葉から考察する定着の特徴

本節では過去の若者言葉、その中でも特に現在定着して使われている言葉に重点を置き、なぜ定着するに至ったのかを考察した。フランス語で「労働争議中の策略的な妨害破壊行為」という意味を持つ「sabotage」の発音の一部に「る」をつけて「怠業する」という動詞にした『サボる』、故事の「牛耳を執る」の発音の一部に「る」をつけた『牛耳る』、本来否定的な語の前につく言葉として使われてきたが明治後半から大正あたりに肯定的な意味の前にも使われ始めて定着した『とても』、高さや質・程度などが一番高いことを指す「最高」や逆にそれらが一番低いことを指す「最低」が感嘆詞としても使われはじめて定着した『最高』・『最低』の4つを調べ考察したが、明確な定着の根拠を挙げることは困難であった。しかし調査していくなかで、「短縮型」については由来となった言葉とは全く同じ、またはほぼ同じ言葉を表すのではなく、異なる意味やニュアンスを持たせた結果、その言葉がただ単に「短縮」された言葉ではなく別の意味をもった新しい言葉になったのではないかという考えを持ち、また「意味拡大

型」については、元からあった言葉であるが故に「若者言葉」という感覚自体があまりないのではないかという考えを持った。

ここから「短縮型若者言葉」については「由来となった言葉からの意味やニュアンスの変化」、「意味拡大型若者言葉」については「元の使われ方と比較して違和感を持つかどうか」が定着の特徴や傾向となるのではないかという推論を立てた。

## 第2章 若者言葉に関する意識調査結果

前章で立てた定着する若者言葉の特徴や傾向の推論を証明するため意識調査を行った。現在定着している言葉は調査の項目として不適切である（言葉がもともと使われていなかった時代を知らないという推論にしかならないという理由による）ため、現在定着しきっていない、しかし浸透してきていると思われる言葉を調査項目とした（対象は19歳～23歳のみ）。

### 第1節 「略語型若者言葉」に関する意識調査結果

「うざい」「きもい」「めんどい」「たるい」「ミスる」「ばない」「とりま」「まじ」の8つの言葉について由来となった言葉からの意味やニュアンスの変化と浸透の度合いについて調査した。

その結果、「短縮型若者言葉」は由来となった元の形の言葉も含めて「知っている」と答えた人が多かったが、その一方で「使う」「どちらかというを使う」と答えた人は「どちらかというに使わない」「使わない」と答えた人よりも全体的に少ないという傾向が見られた。つまり若者世代間と限定しても定着していない言葉が多いということが分かる。

具体的には「使う」または「どちらかというを使う」と答えた人が過半数を超えた若者言葉は「めんどい」「ミスる」「まじ」の3つのみで大多数が使っている言葉は「まじ」のみであった。また、元の形と比較した場合に多く使われていると言える若者言葉は「うざい」「ミスる」「まじ」の3つのみであった。

### 第2節 「意味拡大型若者言葉」に関する意識調査結果

「全然」「普通」「終わった」「激しく」「引く」「やばい」「残念」の7つの言葉について元の使われ方と比較して違和感を持つかどうかと浸透の度合いについて調査した。

「意味拡大型若者言葉」は若者言葉としての言葉の使い方に違和感を持つかという問いに対して「どちらかというを持たない」「ほぼ持たない」と答えた人がほぼすべての言葉で過半数を超え、大半の人はここに挙げた7つの言葉の新しい使われ方に違和感を持っていないということがわかった。また「使う」「どちらかというを使う」と答えた人もほぼすべての言葉で約8割を超える結果となった。少なくとも今回の意識調査で調査対象項目とした言葉は確実に浸透していていることが結果から読み取れる。

## 第3章 意識調査の分析と考察

### 第1節 「略語型若者言葉」における分析と考察

「短縮型若者言葉」は由来となった元の形の言葉も含めて若者世代に定着していない言葉が多いということが前章でわかったが、さらに調べてみたところ、新しい言葉のほうを「使う」または「どちらかというを使う」と答えている人は元の形のほうにも「使う」または「どちらかというを使う」と答えている人が多いことがわかった。よって元の形と新しい形のどちらにも「使う」または「どちらかというを使う」と答えた人に着目し、それぞれの言葉について詳しく考察していったが、今回挙げた「短縮型

若者言葉」は全体的に若者にさえ受け入れられていない言葉が多く、浸透した理由の特徴や傾向を探し出すことはできなかった。唯一大半の人に使用されていた「まじ」については由来となった言葉からの意味やニュアンスの変化が見て取れたが、一般的な定着の特徴として挙げるには不十分である。

また、今回は若者言葉として浸透しつつあると思っていたものを調査項目にしたがあまり浸透していなかったという結果から、「短縮型若者言葉」自体が浸透しにくい言葉なのではないかと考えた。

## 第2節 「意味拡大型若者言葉」における分析と考察

今回の意識調査で扱った7つの「意味拡大型若者言葉」は全体的に違和感を持つと答えた人も少なく、使用しているという人も多かった。また7つの言葉それぞれについても詳しく見て調査した結果、若者言葉としての使い方に違和感を持っている人でも実際には使用する場合もあり、またその逆もあるということがわかった。違和感を持っていない言葉の使用率は大抵の場合高いということではわかったが、それを定着の要因と断定するほどの調査結果は得られなかった。ただし「短縮型」に比べて「意味拡大型」は浸透しやすいのではないかと推論を立てることができた。

## 終章 研究の成果と課題

浸透する若者言葉においてそこに特徴や傾向はあるのか、またあるとすればそれは何なのかということをも本研究の目的としていたが、過去の若者言葉からも、またそこから立てた推論に基づいた意識調査からも明確な特徴や傾向は見つけられなかった。しかし「短縮型若者言葉」と「意味拡大型若者言葉」の2つに分けて調査していった結果、「意味拡大型若者言葉」のほうが浸透しやすいのではないかという考えに至った。また意識調査の結果から、若者言葉について違和感を「とても持つ」と答えた人でも実際は「使う」と断言しているなど、正しいことが必ずしも広まっていくのではないことが実証されたのではないかと思う。

課題としては、意識調査の対象項目となる言葉を15個も用意してしまったことで質問が選択形式に限られ、細かい感覚の調査まですることができなかったことが挙げられる。質問の答えが「なんとなく」など曖昧な表現になってしまったため、今回行った意識調査の他に1人1人にじっくりと話を聞く形式の意識調査も行うとより詳しく調査ができたのではないかと思う。これらの点を改善すれば若者言葉の定着の特徴や傾向についてもっと多くの事がわかるかもしれないと感じた。

最後に、本論文を執筆するにあたりご指導くださった菊地先生をはじめ、貴重な助言、意識調査の協力をして下さった日本語研究室、国語科のみなさんに深く感謝申し上げます。

## 参考文献一覧

- 井上史雄 『方言学の新天地』 明治書院 1994
- 北原保雄 『みんなで国語辞典！』 大修館書店 2006
- 窪菌晴夫 『新語はこうして作られる』 岩波書店 2002
- 竹林一志 『これだけは知っておきたい言葉づかい 時とともに言葉が変わる理由』 笠間書院 2011
- 松村明、山口明穂、和田利政 『旺文社 国語辞典 第九版』 旺文社 1998
- 米川明彦 『新語と流行語』 南雲堂 1989
- 米川明彦 『若者語を科学する』 明治書院 1998